様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ０１０２４

研究課題名（和文）日本人移民・移住史とのリンケージからみた新しいアメリカ・センサス史像

研究課題名（英文）New American Census history through linkage with Japanese immigration/migration history

研究代表者
菅　美弥（Suga, Miya）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：５０３７６８４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の課題１マイノリティへの調査実態の経年的な検証と、課題２センサスと日米の史・資料とのリンケージについての研究成果を、2019年12月には『遥かなる「ワカマツ・コロニー」―トランスパシフィックな移動と記憶の形成』中、第1章「トランスナショナルな移住・移動と『移民』送り出しネットワーク――会津若松・北海道・横浜・カリフォルニア」として公刊した。また建国期から1880年までの調査実態の変容を包括的にみた単著『アメリカ・センサスと「人種」をめぐる境界――個票にみるマイノリティへの調査実態の歴史』（2020年1月、勁草書房、608頁）に結実させた。本書は、アメリカ学会から中原伸之賞を受賞した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
1870年センサスに記載のあった「ワカマツ・コロニー」を始めとする初期の移住者に関して、日本側とアメリカ側の様々な史料の収集を行った。成果発表として、アメリカカリフォルニア州で開催されたワカマツコロニー150周年記念祭と韓国アメリカ学会での国際大会において、英語による招待講演を行った。従来ナショナルな文脈で検証されてきたアメリカ・センサス史と、出移民研究への関心が希薄となっている日本人移民・移住史をつなぐ作業の経過発表を行うことが出来た。それらの講演により、多くが日本語を読解しない日系アメリカ人３、４世のオーディエンスやコミュニティに対して成果の共有や国際的なアウトリーチが可能となった。

研究成果の概要（英文）：This research project has two major agendas: One is examination of the condition of the local enumeration on minorities over periods of time, and the linkage between histories of U.S. census and Japanese immigration/migration. It explores the transformation of the enumeration on minorities and boundary of whiteness from the first Census in 1790 to the eleventh Census in 1890. Results of this research include an article and a book written in Japanese. In December 2019, "Transnational Migration and Network of Sending Immigration---Aidzu Wakamatsu/ Hokkaido/ Yokohama/ California" was published. In addition, a monograph, _American Census and the Boundary over "Race": The History of the Enumeration of Minorities reflected in Population Schedules_(January 2020, Keiso Shobo, pp.608).This book received the Nobuyuki Nakahara Book Award from the Japanese Association for American Studies in 2021. Both translations of tiles are mine.

研究分野：アメリカ史

キーワード：アメリカ・センサス　マイノリティ史　環太平洋　リンケージ　移民・移住　「人種」の境界　調査票　日本人移民

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）アメリカ・センサスは 1790 年から始まったが、アメリカ史研究者にとって、手書きのセンサス調査票は、建国当初からの「名もなき人々」や「一般の人々」の物語の一断片を示す「ミクロな史料」である。研究開始当初の学術的背景として、センサス調査票などの史料はアメリカ史研究者にとって極めて重要な史料的価値があるにもかかわらず、我が国ではほとんど顧みられていなかったことがある。国際共同研究が大きく進展する中、センサスは「単なる数字に過ぎない」という誤解と偏見から、日本におけるセンサス史研究は大きく取り残されていた状況にあった。

（２）他方米国では、センサス史をナショナルな文脈で探求する研究が主流であり、リンケージもアイルランド人など大西洋からの移民を対象にするものばかりであった。つまり、太平洋からの移民とのリンケージからの研究は皆無という状況であった。実際、アジアからの移民が増えていく 19 世紀中庸以降の環太平洋の移動の歴史とのリンケージを通じてセンサス史を眺めた研究はみられない。別言すれば、米国ではアジア系移民への深い理解に基づくセンサス史研究がなされていなかった。

（３）アメリカ社会史研究の分野では、単一人種やエスニック集団を対象としたものが多く、また時代を狭く限定したものが多い状況があり、包括的な通史の叙述から離れる傾向にあった。

２．研究の目的

（１）本研究の目的は、センサス調査票をはじめとする多様な史料のリンケージによって、新しい史実の発見と方法論上の挑戦を行い、日本史、アメリカ史、といった従来のナショナルな枠組みを越えた新しく包括的なセンサス史を叙述することにある。センサス調査票には個々人の情報が調査されるようになった 1850 年から、「一般の人々」の名前、属性、生まれた年と場所、職業、そして「肌の色」「人種」が記載されている。とりわけ多くのマイノリティの「一般の人々」にとっては、10 年に 1 回のセンサスが唯一残された生きた証である。本研究では、こうした「単なる数字」とは逆の社会史的重要性を喚起するための検討を試みた。

（２）従来、1885 年の官約移民以前の日本人移動は、漂流民、留学生、移住者などを主体として個別具体的に描かれてきたが、本研究では、幕末、明治初期の移動の軌跡を類型化し、環太平洋世界の移動の大きな文脈の中に位置づける。査証、日米双方の新聞などの一次史料と 1860 年、1870 年の センサス調査票等をリンケージすることで、より包括的で立体的な環太平洋の移動を描く。幕末、明治維新後の日本人移民・移住史とセンサス史をリンケージさせることで、環太平洋に開かれる新しいセンサス史像を提示し、そのグローバルな発信を行う。具体的な目標としては以下の諸点を掲げた。

① センサス調査票の経年的（longitudinal）なリンケージ、マイノリティへの調査実態の経年的な検証

② 日米の史・資料とのリンケージ

③ 環太平洋に開くセンサス史のグローバルな発信

３．研究の方法

本研究の根幹を成すのは、膨大なセンサス調査票の検証である。非常に地道な作業であるが、こうした基礎研究と方法論的検証が、新たな発見や独自性と創造性につながる。さらに複数史料のリンケージになると、複数の言語理解、データの整理・解析等、課題も倍増する。だからこそ、人口センサスの膨大な調査票を中心とするセンサス史の史料と、日本側の査証、新聞などの一次史料を駆使し検証する作業は、広義の方法論としても、アメリカ・センサス研究と日本人移民・移住史研究をつなげる独創性を持つ。以下が、研究の方法と年度に従った研究の展開をまとめたものである。

（１）全期間を通じて、データベースの活用による膨大なセンサス調査票やアメリカ新聞記事等、諸史料の収集と分析を行った。その際、各時代、地域、集団ごとに調査票のリストを作成し、リストを通じて個別事例の検証を行った。

（２）コロナ禍より前の研究期間中には、海外調査としてカリフォルニア・ファミリーヒストリ

ーセンター（サンフランシスコ）、及び、1870 年センサスに記載のあった「ワカマツ・コロニー」跡地（カリフォルニア州エル・ドラド）でのフィールド調査およびインタビュー調査を行った。

（３）（２）と同様に、時期としてはコロナ禍前になるが、幕末・明治初期の人の移動に関する国内調査として、「ワカマツ・コロニー」と同時期の北海道移住に関する史料収集（北海道札幌市 北海道大学図書館、北海道博物館）やフィールド調査（北海道余市町、当別町等）を行った。さらに、居留地のトランスパシフィックな送り出しネットワークについての史料収集（北海道函館市、神奈川県横浜市）を行った。

４．研究成果

（１）センサス調査票の経年的（longitudinal）なリンケージ、マイノリティへの調査実態の経年的な検証に関連する成果

本研究の最も大きな研究成果としては、建国期から 1880 年までの調査実態の変容を包括的にみた単著『アメリカ・センサスと「人種」をめぐる境界―個票にみるマイノリティへの調査実態の歴史』（2020 年 1 月、勁草書房、608 頁）がある。本書は、研究目的である、日本史、アメリカ史、といった従来のナショナルな枠組みを越えた新しいセンサス史を叙述し、センサス調査票の経年的（longitudinal）なリンケージ、日米の史・資料とのリンケージを行ったものである。なお本書は、アメリカ学会から中原伸之賞（第 2 回）を受賞することとなった。この賞は、「日本、アメリカ、あるいは世界のアメリカ研究の水準を高めることに貢献できる、深い知見と新しい視座を提供する特に優れた研究書に与えられる」もの、と位置付けられている。

さらに、2021 年から 22 年にかけては、1860 年に遣米使節の随伴船であった咸臨丸の入院中の水夫数名、そして 1870 年にはカリフォルニア州においてわずか 30 名程度の規模であった日本人への正確な記載があった理由を探った。特に 1860 年において、カリフォルニア州のサンフランシスコを含む地区のマーシャル本人とマーシャルが任命できる調査員が、南部テネシー州出身者によって占められていた点に注目した。それにより、サンフランシスコにおける調査の現場では、家族や同郷者のコミュニティ内部で情報を共有していた可能性が高いことが明らかになった。当時カリフォルニア州には、アジア太平洋を始めとする世界中からの移民だけでなく、北部や南部からの国内移住者が多数おり、国内外の複数の移住が交差していた。こうした複数の経路を経た移住者の世界とセンサス調査員、そして調査実態を重層的に交差させて検証した研究はこれまでみられない。このような視点で、新しいアメリカ・センサス史像を叙述するべく、南部テネシー州出身者で占められた調査員のライフヒストリーへの研究を進め、成果を発表した。

（２）センサスと日米の史・資料とのリンケージに関連する研究成果

この研究課題に関連する研究成果として、「トランスナショナルな移住・移動と『移民』送り出しネットワーク――会津若松・北海道・横浜・カリフォルニア」、海外移住 150 周年研究プロジェクト編『遥かなる「ワカマツ・コロニー」―トランスパシフィックな移動と記憶の形成』（彩流社、2019 年、第 1 章、13-58 頁）がある。これは、「ワカマツ・コロニー」について史実に基づき包括的に探究したものである。「ワカマツ・コロニー」とは、1869 年に行われた初のアメリカ大陸への集団的移住の試みであった。ただし、「ワカマツ・コロニー」については、これまで「歴史小説」の影響により史実と想像が混在して記憶されたり、想像部分が独り歩きしたりしていた。筆者はセンサス調査票や査証などの史・資料を駆使し、トランスナショナルな移民送り出しネットワークと、北海道への移住を含む環太平洋の日本人移住を包括的にかつ、具体的な史料から光を当てた。

さらに、本研究は、初めてセンサスに記載があった日本人とは、病気となり合衆国船員病院に入院していた咸臨丸水夫であったことを明らかにした。1860 年センサスが、咸臨丸がサンフランシスコに訪問中に行われたため、「一般の人々」の記録が残ることとなったのである。そのうえで、2022 年の論文では、この時の記録を、1860 年の通常の人口センサスのみならず、センサスの別の統計である、死亡統計（モータリティ・スケジュール）にも対象を広げ、二つのセンサス上の記載の異同や、咸臨丸水夫への合衆国船員病院における特別な扱いの理由を次の論考中で明らかにした。「複数の移住・移動と「家族」からみるアメリカ・センサス：1860 年のサンフランシスコにおける諸史料の検証」『JICA 横浜　海外移住資料館　研究紀要』16 号、2022 年、1-27 頁。

（３）環太平洋に開くセンサス史のグローバルな発信に関連する研究成果

1870 年センサスに記載のあった「ワカマツ・コロニー」を始めとする幕末・明治初期の移住者に関して、日本側とアメリカ側の多岐にわたる史料収集を行った。その成果の発表として、2019 年、アメリカカリフォルニア州で開催された「ワカマツ・コロニー150 周年記念祭」と韓国アメリカ学会の国際大会において、英語による招待講演を行った。それらの講演により、従来ナショナルな文脈で検証されてきたアメリカ・センサス史と、出移民研究への関心が希薄となって

いる日本人移民･移住史をつなぐ作業の経過発表を行うことが出来た。特にアメリカにおいては、日本語を読解しない多くの日系アメリカ人のオーディエンスやコミュニティに対する、成果の共有や国際的なアウトリーチが可能となった。

（４）今後の展望

本研究の学術図書としての出版により、研究開始当初の学術的背景にあった、センサスは単なる数字であり、センサス調査票には社会史的な史料価値がない、との誤解を一定程度解くことが出来たと思われる。ただし、アメリカにおけるセンサス史はいまだに、ナショナルな叙述や環大西洋の移民史とのリンケージに偏っている。そのような現状を打破するべく、現在、本研究の成果である単著を英語に翻訳し、アメリカでの出版を目指している。環太平洋に開く新しいセンサス史像を提示し、そのグローバルな発信をより一層展開させることが、今後の展望である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Miya Shichinohe-Suga, Hanako Shinohara, David Wong, Stuart Gaffney, John Lewis	４．巻 72
２．論文標題 Tokyo Gakugei University's Spring 2020 Online Lecture Series: Research Findings and Implications for Future Programs Based on Lectures Addressing COVID-19 and Structural Racism	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Bulletin of Tokyo Gakugei University, Humanities and Social Sciences II	６．最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 菅（七戸）美弥	４．巻 16
２．論文標題 複数の移住・移動と「家族」からみるアメリカ・センサス：1860年のサンフランシスコにおける諸史料の検証	５．発行年 2022年
３．雑誌名 JICA横浜　海外移住資料館　研究紀要	６．最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ken SUGIHARA, John LEWIS, Stuart GAFFNEY, Miya SHICHINOHE-SUGA	４．巻 73
２．論文標題 Sexual Orientation and Gender Identity Education as Intercultural Education: A Case Study from Tokyo Gakugei University's 2021 International Student Step Up Program	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東京学芸大学紀要　人文社会科学系　II	６．最初と最後の頁 61-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　6件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 菅（七戸）美弥
２．発表標題 貴堂 嘉之『南北戦争の時代　19世紀』書評発表
３．学会等名 岩波新書〈シリーズ アメリカ合衆国史〉第2回　合評会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 菅（七戸）美弥
２．発表標題 アメリカ・センサスの包括的な歴史像を求めて――センサス史を環太平洋に拓く試み
３．学会等名 移民研究会例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 菅（七戸）美弥
２．発表標題 アメリカ・センサスと「家族」：1860年から1880年の調査票にみる「家族」と「人種」の境界
３．学会等名 日本アメリカ学会年次大会　部会B　アメリカン・ファミリー：多様な家族のすがた（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Miya Shichinohe-Suga
２．発表標題 The American Census and the Boundaries of Race: What Data Collection Methods Reveal About Race in 19th Century America Miya Shichinohe-Suga: American Census and the Boundary of “ Race," Institute of
３．学会等名 Contemporary Asian Studies (ICAS), Temple University Japan（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Miya Shichinohe-Suga
２．発表標題 Linking U.S. Census History and Japanese American History
３．学会等名 WakamatsuFest150 1869-2019, Celebrating 150 Years of Japanese American Heritage（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Miya Shichinohe-Suga
２．発表標題 Linking Historical U.S. Census Data to Early Japanese Transpacific Migration History: 1860-1870
３．学会等名 2019 ASAK International Conference（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Miya Shichinohe-Suga
２．発表標題 “Self-image through the mirror of America: How Young Students see U.S. Politics and issues of immigration and minorities”
３．学会等名 After the Midterm Elections - US Politics/Society and Japan（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

１．著者名 菅（七戸）　美弥	４．発行年 2020年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 608
３．書名 アメリカ・センサスと「人種」をめぐる境界　個票にみるマイノリティへの調査実態の歴史	

１．著者名 海外移住１５０周年研究プロジェクト	４．発行年 2019年
２．出版社 彩流社	５．総ページ数 407
３．書名 遥かなる「ワカマツ・コロニー」　トランスパシフィックな移動と記憶の形成	

１．著者名 Miya Shichinohe-Suga, Eiichiro Azuma, Hisami Hasegawa, Yuko Itatsu, Norifumi Kawahara, Michiyo Kitawaki, Yuukichi Niwayama, Tomoko Ozawa	４．発行年 2018年
２．出版社 Sairyusha	５．総ページ数 287
３．書名 "Japanese Interracial Families in the United States, 1870-1900: What the Census Manuscript Population Schedules Reveal" in _Japaneseness across the Pacific and Beyond_	

〔産業財産権〕

〔その他〕

東京学芸大学　人文社会科学系 人文科学講座 地域研究分野 教授　菅美弥
https://kenkyu-web.u-gakugei.ac.jp/Profiles/3/0000226/profile.html

東京学芸大学　菅美弥　研究室
https://www2.u-gakugei.ac.jp/~miyasuga/index.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	UC San Francisco	Michigan State University		